

大豆種子（里のほほえみ）栽培ごよみ

優良種子とは

「純粋性」、「健全性」、「良質」を備えたもの

- 異品種や異種穀粒、夾雑物が混入していない。
- 種子伝染性病害虫（紫斑病等）に侵されていない。
- 発芽率、発芽揃が良い。
- 被害粒、未熟粒および異物の混入がない。

『純粋性』、『健全性』確保のために！

疑わしくは抜くべし！！

「これは異株かな??」と迷ったらその株全体を株元から抜き取る。

異株の除去

収穫までできるだけ多く実施する。

初生葉展開期	・畦間に生育している株は漏生と見なして抜き取る。 ・胚軸色の異なる株、形状の異なる株、異種類の作物を抜き取る。
開花期	・花色、葉型、開花期、草丈の異なる株、葉色が濃い株を抜き取る。 ・葉色が黄化あるいは薄い株は、ウイルス病やその他の病害に罹っている可能性が高いので抜き取る。 ・葉がチリチリになったり小さくなっている株、あるいは全体が縮んだような株は、ウイルス病に罹っている可能性が高いので抜き取る。
成熟期	・莢の色、莢の大きさ、落葉期、成熟期の異なる株を抜き取る。 ・青立ち株を抜き取る。

種子伝染性病害虫（紫斑病等）を防ぐ

ほ場にあってはならない。見つけ次第その株全体を株元から抜き取る。

適正な収穫・乾燥・調製作業による発芽率確保と混種防止の徹底的

1. ほ場の選定

- 種子場は同一品種の団地になるよう調整し、近隣ほ場に交雑可能な品種の作付が無いよう近隣農家と連携を図る。
- 連作は2年までを原則とし、ダイズシストセンチュウの発生が見られたほ場は避ける。
- 排水性の良好なほ場に作付する。

2. 徹底した湿害対策

- 地表排水（額縁明きよ等）と地下排水（弾丸暗きよ等）による排水性の改善を図る。
- 発芽時は特に湿害に弱いので、明きよを設置し苗立ち及び初期生育を確保する。

3. 土づくり・施肥

（土づくり）

- 土壌酸度はpH6.0～6.5を目標
- 苦土炭カルを10a当たり60～100kgを施用する。
- ようりんを10a当たり60～80kgを施用する。
- 有機物の施用例 良質完熟堆きゅう肥：1～2トン/10aを目安
ただし、未熟有機物（堆肥等）の施用は混種や雑草多発を防止するため実施しない。

（施肥）

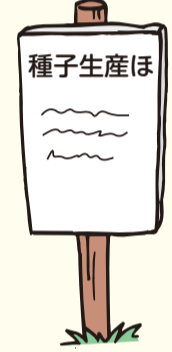




- 基肥全量施肥とする。

施肥例	肥料名	施肥量
	BB-500	35～45kg/10a

- 「しわ粒」軽減対策として子実肥大盛期頃の肥効が期待される緩効性窒素肥料の施用。

4. 種子消毒

- 種子伝染性病害虫等の防除のため必ず種子消毒を行う。
（クルーザーMAXXおよびキヒゲンR-2フロアブル等で行う。）
※クルーザーMAXXは湿害軽減技術を補完する効果も期待される。

月	6月			7月			8月			9月			10月			11月					
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上					
生育過程				初生葉展開期			開花期			子実肥大期			成熟期								
主な作業	ほ場準備 播種・立て札立て			除草剤散布			中耕 漏生株抜き			培土 わい化（ウイルス病）株抜き			異株抜き 病害虫防除			異株抜き 害虫防除			異株抜き 収穫 乾燥 調製		
																					

5. 適正播種

- 播種時期は6月下旬～7月上旬で、播種量は4～5kg/10aとする。
- 播種深度は3cmが基準。
- 栽培密度は、畦間：60～70cm、株間：10～15cmとする。

6. 雑草防除

- 除草剤散布と中耕・培土により、雑草を防除する。
- 播種後、クリアターン乳剤等の土壌処理薬剤を散布する。
- 雑草が多い場合はナブ乳剤等の茎葉処理剤で防除する。

7. 中耕・培土

- 播種後20日頃中耕を行い、その7～10日後に培土を行う。
なお、1回で仕上げる場合は播種後30日頃に中耕・培土を行う。
- 断根等により生育を阻害するので、遅くとも開花1週間前までに終了させる。
- 培土は、水が溜まらないように株元まで土で覆う。（「山型」にする。）

8. 病害虫防除

紫斑病	・必ず種子消毒を行う。 ・薬剤散布は最低2回以上行う。 ただし、アミスター-20フロアブルは耐性菌が出やすいので、隔年使用とする。 ・散布時期は開花15～25日後とし、1回目の散布はこの期間の早い時期に行う。
へと病	・開花10日前～子実肥大期に薬剤防除する。 ・開花前に発生した場合は茎葉に薬剤散布する。 ・発生が拡大する場合は、開花40日後までに追加防除する。
害虫	・カメムシ類は開花15日後から薬剤散布する。 ・ハスモンヨトウは、8月下旬～9月上旬、発生初期に薬剤散布する。 ・コガネムシの幼虫防除は、播種前に殺虫剤を散布する。

9. 収穫

- コンバインおよびコンバイン袋等は、使用前に徹底した清掃と点検を行う。
- 種子と一般大豆の両方を栽培している場合は、最初に採種ほの収穫を行う。
- 倒伏や成熟ムラのところは刈り分けし、種子にしない。
- 収穫時期は茎水分が40%以下、子実水分が18%以下になった頃。
- 収穫前に青立ち株や大型の雑草を除去し、汚損粒の発生防止に努める。
- 刈り遅れると、亀甲じわ粒が増加したり、収穫ロスが出るので注意する。
- 刈取時刻は、茎や莢の表面が乾いている晴天の10～16時頃に行う。また、泥の混入を防ぐため、刈り高さ10cm以上とし、刈り残しがない程度で高刈りする。

10. 乾燥・調製

- 乾燥調製室は常に清潔にするとともに、機械および器具等は十分清掃しておく。
- 作業中ごぼれ粒が発生した場合は清掃破棄し、絶対に種子には混入してはならない。
- 出荷までの保管場所は一般栽培の大豆とは別にする。

（乾燥）

- 乾燥機を使用する場合は通風乾燥、または設定温度30℃以下にする。
- 出荷時の水分は13.5%とする。ただし、過乾燥の状態では選別調製すると剥皮粒が発生しやすいので、子実水分14%程度で選別調製作業に入ると良い。

（調製）

- 選別機で確実に選別を行い、品質に応じて7.9mm以上の篩で調製を行う。
- 大豆選別機や色彩選別機により、紫斑粒や褐斑粒、褐色粒、虫害粒等を除去する。
- 異品種および種子伝染性病害虫が混入していると種子にならないため、確実に除去する。

11. 種子の農産物検査規格（合格）

- 発芽率=80%以上
- 被害粒及び未熟粒=10%以下
- 異物=0%
- 水分=15.0%以下（なお、目標は13.5%）

優良種子の生産に努めましょう

全農とちぎ・栃木県・（公社）栃木県米麦改良協会